

まえがき

信州大学ではここ 20 数年にわたって環境に関心を持ち、何らかの程度で自然環境や社会環境に関わる研究・教育にたずさわっている教官が、同一の土俵に介し、志を一つにして、信州の地域に起つている環境問題の解決の為に、それぞれが取り組んでできました。その一年間の仕事をまとめて、「環境科学年報」に報告してきました。

回も重なり、今回で 23 号を迎えます。一度、消えかけた灯火を何とか消さずに出来た事は、農学部の間ををはじめ、松本、上田、長野の各学部の諸先生方の熱い心意気があつたからこそです。感謝しています。22 号の出版も、その一つの成果です。理学部の藤山先生の努力で、本当に灯を消さずに済みました。今回、新たなメンバーも加わり、100 名を越える会員が誕生しました。斬新で、フレッシュな仲間達と一歩前進しましょう。

本年度は、長野県の自然環境の特色の一つでもある「河川の源流域」について、「源流域の自然と文化」と題して、天竜川の源流域の構造と機能；山の保水力の問題、下流域に対する上流域の責任、峠と文化の問題、河岸段丘と人の生活などを含めて考える事にしました。長野県は、太平洋に流下する天竜川と木曽川、日本海に流下する姫川と千曲川が県内を南と北に二分しています。山と海をつなぐ川、その川を利用して生物の移動の問題、人の交流、峠による異文化の交流等水の移動に伴う様々な問題があります。

アルプスに降った雨が川となり、海に流れこみます。山に降った雨は、一部は地表を流下して川へ、しかし大半は森林の樹木の根や地表に堆積・分解された落葉を通して、地中に保水されます。それが、「源流域」です。

天竜川の源流域と言うと、諏訪湖となります。しかし、更に諏訪湖の集水域の源流域をも調査対象にしました。

これらのレポートを使って、地域の文化・社会を一步でも進めるのに役立てば幸いです。

2001 年 3 月

世話役代表

信州大学農学部

吉田 利男